高等学校の部活動におけるスポーツボランティアについて

Research on sports volunteer in high school club activities

中村学園大学　流通科学部
音　成　陽　子

キーワード：高校生，スポーツボランティア，依頼型，なぎなた
sports volunteer, request type, high school student

Ⅰ．はじめに

文部省（現・文部科学省）は「スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究協力者会議」(2000）において，「地域におけるスポーツクラブやスポーツ団体において，報酬を目的としないで，クラブ・団体の運営や指導活動を日常的に支えたり，また，国際競技大会や地域スポーツ大会などにおいて，専門能力や時間などを進んで提供し，大会の運営を支える人のこと」とスポーツボランティアを定義している。また，SSF 笹川スポーツ財団の『スポーツ・ボランティア・データブック』(2004）において「報酬を目的とせず自分の労力，技術，時間を提供して地域社会や個人・団体のスポーツ推進のために行う活動のことを意味する。ただし，活動にかかる交通費等，実費程度の金額の支払いは報酬に含めない」とスポーツボランティアを定義している。

2020年東京オリンピック・パラリンピック開催は，わが国におけるスポーツの価値を見直す良い機会になることが期待されている。文部科学省は2017年３月に第２期スポーツ基本計画を策定し，今後５年間に総合的かつ計画的に取り組む施策の１つに「する」「みる」「ささえる」スポーツ参画人口の拡大をあげている。2019年ラグビーワールドカップ，2020年第東京オリンピック・パラリンピック，2021年ワールドマスターズゲームまでの３年間であるスポーツゴールデンイヤーズは，日本が国際大会の開催国となる点で，「ささえる」スポーツが重要になると考えられる。笹川スポーツ財団『スポーツライフに関する調査』(2016）によれば，「する」スポーツにあたる週１回以上の実施者は2012年の59.1％を頂点に減少傾向が続き，2016年は56.0％であった。「みる」スポーツについては，直接観戦した者は32.9％，TV で観戦した者は88.0％であった。「する」スポーツについては，スポーツボランティアの実施率は2010年の8.4％を頂点に減少傾向が続き，2016年は6.7％となっていた。つまり，「する」スポーツの実施率向上も重要であるが，それ以上に「ささえる」スポーツの参画を促進することが課題であるといえる。「ささえる」スポーツには，日常的・継続的な活動であるチームや団体の運営，非日常的・単発的なスポーツイベントの支援などがあげられる。

高校生のスポーツボランティアの多くは，学校やクラブ関係者からイベントや大会の運営を依頼されて活動しているといえる。実際の高校生のスポーツボランティアの過去１年間の実施は笹川スポーツ財団（2018)『子ども・青少年のスポーツライフ・データ2017』によると17.6％であった。しかし，高校生の東京オリンピックでのボランティア実施希望率は42.4％で

あり，参加を促すことは重要であるといえる。そして，高校生のスポーツボランティアの内容は「スポーツイベントの手伝いをした(52.5%)」「スポーツの審判や審判の手伝いをした(30.0%)」という回答が多かった。また，活動のきっかけは，「先生や指導者に言われたから(65.0%)」が最も多かった。

そこで，本研究は高校の部活動に所属する高校生を対象に，スポーツボランティアの認識を明らかにするとともに，そのあり方について検討することを目的とした。高校生の所属する部活動はなぎなた部であり，大会主催者からの依頼，部活動の延長として若獅子旗なぎなた大会に携わることからボランティアの認識が低いことが予想される。したがって，「依頼型」のスポーツボランティアの参加の促進と継続性のための検討を行うものである。

Ⅱ．研究の方法

・対象：第35回若獅子旗なぎなた大会の運営に携わり，調査協力を了承した者109名のうち，福岡県内の高校のなぎなた部に所属している高校生41名（男子０名，女子41名）を対象者とした。高校生の平均年齢は16.3±0.7歳（15－18歳），競技歴は2.1±1.8年（０－６年）だった。大会運営における役割は選手委員（召集・呼び出し），時計委員，記録委員だった。

・時期：2018年３月18日（日） 大会終了後

・調査方法：無記名式の質問紙調査用紙をその場で配付・回収した。調査項目は基本的属性，役割，活動のきっかけ，ボランティア意識など20項目とした。

Ⅲ．結果

１．高校生の若獅子旗なぎなた大会における役割

高校生の大会における役割は34名（82.9%）が選手委員，４名（9.8%）が時計委員，３名(7.3%) が記録委員だった。選手委員の役割は，召集・呼び出し・誘導・団体戦の採点掲示である。時計委員の役割は試合時間の管理である。記録委員の役割は，試合結果の記録である。高校生のうち，役割名を正しく選択できなかった者が３名いた。

２．活動のきっかけ

大会に対して協力するきっかけは，学校からの呼びかけ37名（90.2%）であり，その他は主催者からの呼びかけ３名，家族・友人・知人からの呼びかけ１名であった。多くは，学校へ大会運営への協力が要請され、学校から高校生へ呼びかけがあり，それに応じての参加といえる。このようなボランティアのあり方を山口(2004)や内藤（2009）は「依頼型」と呼んでいる。したがって，高校生は依頼型スポーツボランティアが大半を占めていたといえる。

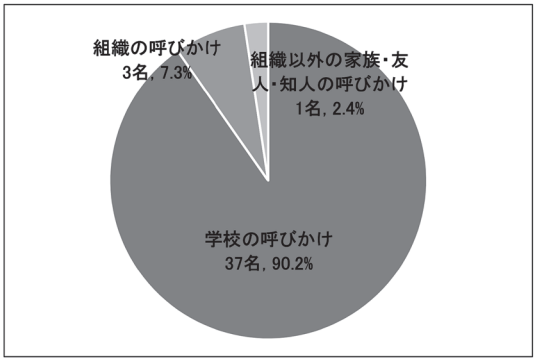


図１．活動のきっかけ

３．ボランティアの認識

高校生のボランティアの認識を図２に示した。ボランティアであると認識した者は10名(24.4%）であり，ボランティアでないと認識した者が最も多く18名（43.9%）だった。わからない、どちらともいえないという回答、つまり、ボランティアの認識が曖昧な対象者は30%を超える値を示した。また，すべての高校生が大会主催者ではないと回答していた。つまり，高校生は大会運営を任されて参加していると認

識していることが示唆された。大会運営に貢献しているものの、スポーツボランティアという認識、ささえるスポーツとしての活動であるとあまり認識されていないことがわかった。さらに，ささえるスポーツ，および，スポーツボランティアという言葉の周知が低いともいえる。

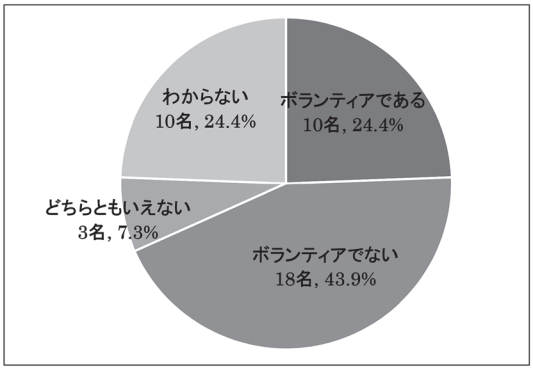


図２．ボランティアの認識

４．事前研修と実際の活動

競技役員のための事前研修は欠席した７名を除き，全員が十分であったと回答した。実際の活動がどうだったかについて，図３に示した。十分に満足したという回答は25名（62.5%）から得ることができた。一方，37.5%には何らかの不満があったという結果だった。図４には，活動に対する認識（複数回答）の詳細を示した。その結果，「いい経験だった（27名，65.9%）」「有意義な体験だった（18名，43.9%）」「やりがいがあった（18名，43.9%）」「楽しかった（17名，41.5%）」が高い割合を示した。大会運営で困ったことがあったという回答は7.3%であった。その内容は，選手の集合や誘導の場所がわかりにくかったということだった。

実際に活動後の感想（複数回答）は，「いい経験になった（27名，65.9%）」「有意義な体験だった（18名，43.9%）」「やりがいがあった（18名，43.9%）」「楽しかった（17名，41.5%）」の順に高い割合を示した。いずれも，活動に対して肯定的な感想だった。

表１は活動後の感想の自由記述から，出現頻度の高い単語を抽出したものである。図５は自由記述をテキストマイニングにより単語の出現頻度や関係性を示したものである。その結果，なぎなた競技に関する①「大会・強い・選手・試合・間近で見る」など，②「技・動き・感動・一生懸命」など，③「競技・ルール・知る」などのカテゴリーに分類できた。このことからは，与えられた役割を遂行しながら、なぎなた競技について学び・情報を得ていたことがうかがえた。大会運営については①「経験・楽しい」など，②「行動・周り・理解」などの実際の活動の様子が浮かび上がった。スポーツボランティアについては，「支える･裏」というカテゴリーが低い出現頻度ではあるがみられた。

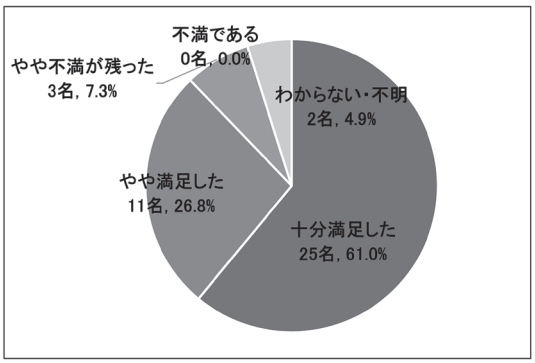


図３．活動の満足度

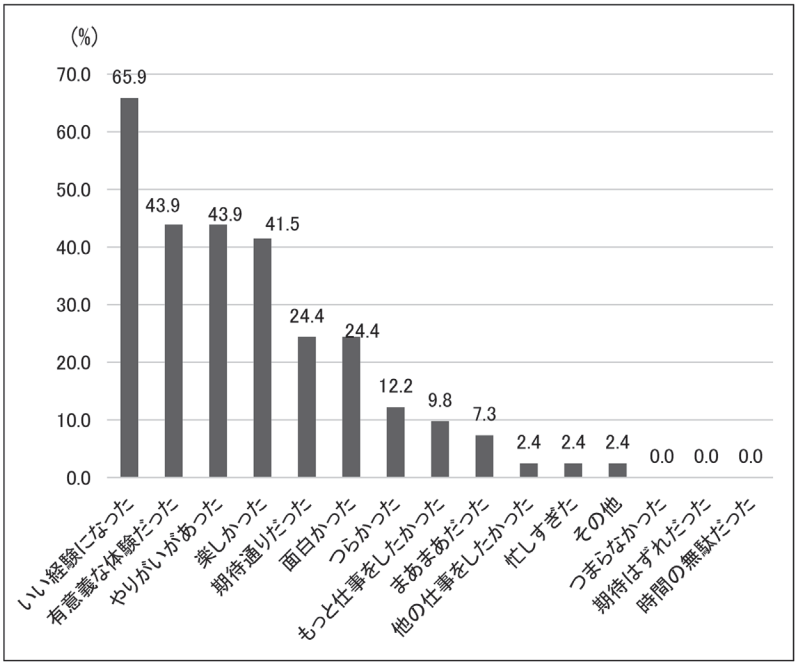


図４．活動後の感想（複数回答）

表１．活動後の感想にみられる単語

抽出語	出現（回）	関連語
見る	9	間近　試合　技
経験	7	よい　新しい
選手	6	強い　試合　技
試合	5	間近　見る　選手
大会	5	参加　選手　役
間近	4	見る　試合
強い	4	選手　学校
知る	4	ルール

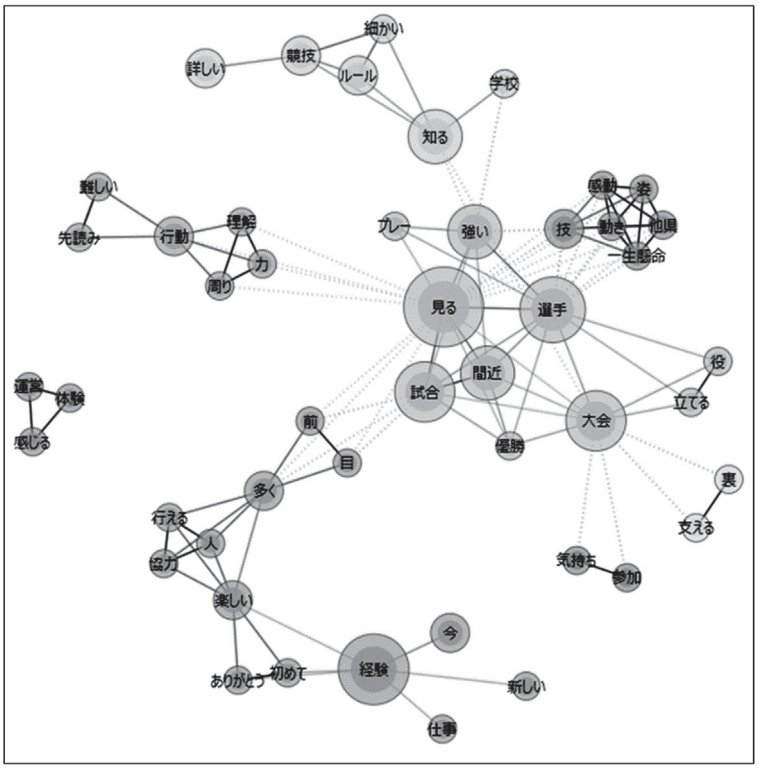


図５．活動後の自由記述

５．競技経験の必要性

若獅子旗なぎなた大会のボランティアに携わるにあたって，競技経験が必要かという結果を図５に示した。競技経験はあったほうがよい(26名，63.4%）が最も高い割合を示し，次いで，必要である（11名，26.8%）という結果だった。このことから，競技経験はあるほうが望ましいと認識していることがわかった。「スポーツ白書2014」によれば，大会をささえるボランティアで専門的な知識が必要な「専門ボランティア」は，審判員，通訳，医療救護，データ処理専門員，大会役員などがあげられる。また，だれでも容易に参加できる「一般ボランティア」は，受付，会場案内，給水・給食，記録・掲示などとなっている。今回，高校生の役割は選手委員（召集・呼び出し），時計委員，記録委員であり，競技経験が問われることはなかった。実際，競技経験のない大学生や一般社会人も一緒に事前研修会を受け，当日の活動を行っていた。

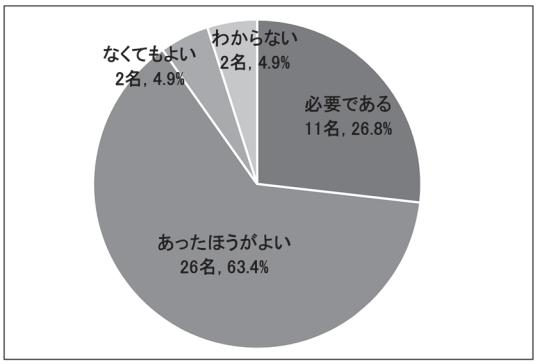


図６．競技経験の必要性

Ⅳ．考察

１．依頼型ボランティアについて

二宮（2017）はスポーツボランティアを自発的な意思と判断に基づき，個人やクラブ・団体のスポーツ活動，ならびに各種スポーツ大会・

イベント等を支え，スポーツ文化の発展に貢献する人（活動）のことと定義している。そして，スポーツ関係の団体や連盟，友人・知人などからの依頼によって参加したボランティアを山口（2004）や内藤（2009）は依頼型ボランティアと称している。つまり，スポーツボランティアには，自ら参加・活動を決定したボランティアと，依頼されて参加・活動している依頼型ボランティアがあるといえる。全国大会や国際大会レベルであれば，審判員以外に多くの運営スタッフを必要とし，広くボランティアを募集することはオリンピックや国民体育大会など枚挙にいとまがない。しかしながら，地方大会の競技員や補助員は，競技団体から人数を確保しやすい学校の部活動への依頼型ボランティアの場合が多いと考えられる。

山口（2004）によれば，従来，日本におけるボランティアが地域や職場からの依頼や団体の一員として参加する外発的動機が主流だったと述べている。Markus ら（1991）は，アジアの文化は自己と他者の間に調和のとれた相互依存関係があり，アメリカの文化は自己を主張し，固有の属性を持ち，他者からの独立性を維持しようとすると述べている。FAIRLEY ら（2013）は，韓国での調査から個々のボランティアに対して得られる利益ではなく、コミュニティの意識や帰属意識としての集団主義的文化に影響されるボランティアであることを示唆している。

以上のことから，日本におけるボランティアは地域やクラブへの帰属意識，人員確保の容易さ，主催者である競技団体とその下部組織となるクラブや学校の部活動という関係から，外発的動機による「依頼型」ボランティアの傾向にあると考えられる。

2．「依頼型」ボランティアの自発性

ボランティアは自発性，自主性，主体性という性格を持つとするならば，依頼型ボランティアには矛盾が生じる。高校生の部活動において，学校・教員・指導者などの依頼を仲介する者からの依頼型ボランティアに，不参加が許容される状況にあるか疑問が残るからである。教員や指導者は大会や試合に出場しない（できない）高校生に，大会運営の役割を与えることが教育的配慮と考えて，「やるべき」となっていないだろうか。難波ら（2017）は「する」「みる」「ささえる」の相互関係について，「する」「ささえる」は「みる」行為とセットで実施され相互に関わりがあることを示唆している。つまり，大会へ貢献するだけでなく，競技の技能を見て学ぶ，試合や大会を知るといった意図がないとはいえなくもない。

実際に高校生は「先生（指導者）に言われたのでやる」「他の人もやるからやる」といった受動的行動，あるいは，追随的行動となることも考えられる。ただし，大束ら（2014）の調査によれば，高校生に必修科目「奉仕」の授業後に，今後のボランティア活動に参加する意欲は高まらなかったといいう結果を得ている。ボランティア活動が課題となり，強制される活動，もしくは，やりたい活動ではないと認識されたと推察される。そこには,「自発性について『しない自由』をもつものでなくてはならないというべき（近藤 .1998b）」こと，つまり，しない自由による自発性，自主性，主体性の保証が必要だったと考えられる。

近藤（1998a）はボランティアの自発性は次の二つがあるという。一つは，自分にふさわしい，引き受けなければならない「やるべき（Sollen）」という自己強制・自己犠牲のような意志をともなう社会的理性の自発性である。もう一つは，自分の生きがいが見出され充実感をいだき，ボランティアに対して積極的な意欲・欲求としての「やりたい（Wollen）」という感性の自発性である。これらの二つの自発性は一つの活動で混在しているという。それは，「やりたい（Wollen）」と思ってやり始めても，場合によっては嫌々行う「やるべき（Sollen）」

という義務感が生じることもあるということである。逆に，「やるべき（Sollen）」だと思って続けるうちに，仲間ができたり，感謝されたりすること喜びや楽しみとなり「やりたい（Wollen）」となることもある。これらの２つの自発性が入れ替わりつつ，ボランティア活動は遂行されるという。そうであれば，ボランティア活動の継続には，意志・理性による自発性だけ，感性・欲求による自発性だけでは不十分であると考えられる。MIRSAFIAN ら（2012）はスポーツボランティアの動機付けの要因には，物質的，社会的，経歴，支援，目的，進歩，義務の７つがあるという。そして，動機付けの効果として，社会的要因が最も高く，義務的要因が最も低いという結果を得ている。さらに，義務的要因は，家族や友人，学校などの他者からボランティアの能力とは異なる期待を示すという。

「依頼型」ボランティア活動が「やるべき（Sollen）」ことなのか，「やりたい（Wollen）」ことなのかということは，いずれにしても活動対象に貢献することであることは間違いない。さらに，しない自由も踏まえて，参加を募る必要があるといえる。つまり，内海ら（1999）のいうところの「依頼されて参加することは一つのきっかけに過ぎない」ということだろう。以上のことから，競技団体などの大会主催者，学校・教員・指導者といった依頼の仲介者，ボランティア活動者である高校生の構造を図7-a のように示すことができるだろう。

音成（2017）では主催者においてもボランティアを依頼する際に，生徒や学生に対して大会に興味を持って欲しい，将来の人材として期待しているというインタビュー結果を得ている。そこで，図7-a は図7-b のように修正することができる。

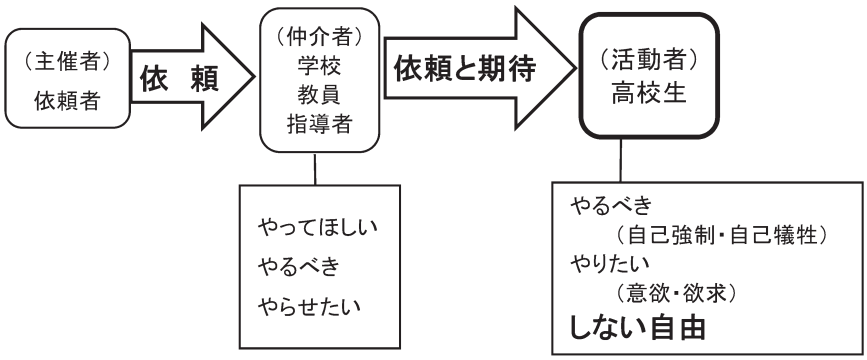


図7-a.「依頼型」ボランティアの構造

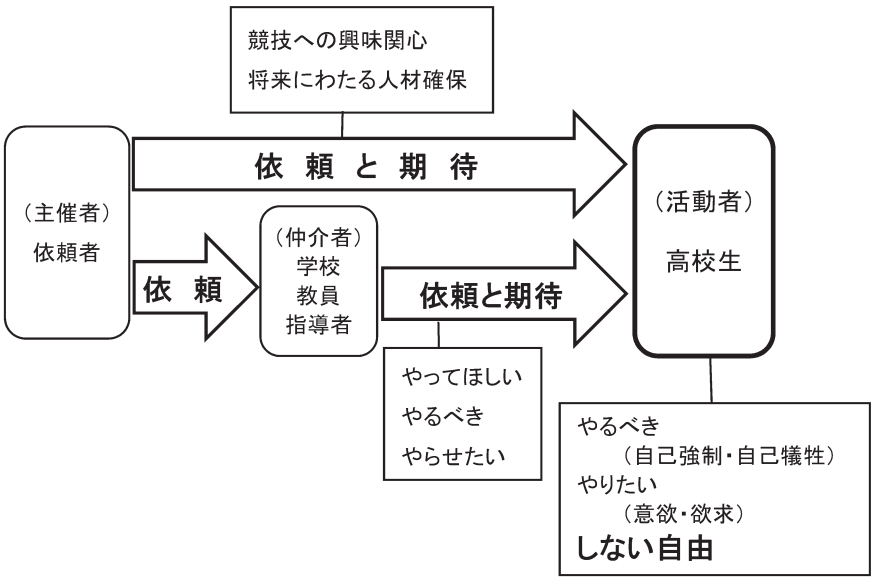


図7-b.「依頼型」ボランティアの構造（主催者，仲介者，活動者の関係）

２．依頼型ボランティアの継続性

内藤（2009）によれば，ボランティアにおける「依頼型」は活動経験が豊富か初めての二極化の傾向がみられるという。若年者における参加動機は，利己的な動機よりも依頼されて地域のために参加という意識が高いとも述べている。さらに，その活動で高い満足度を得ることによって，継続性を持つことが可能ともいう。これは，先に述べた「やるべき（Sollen）」と「やりたい（Wollen）」の二つの自発性との関係が考えられる。柴田ら（2004）は，大学生のボランティア活動の動機として，「自分の役に立つと思ったから」などの利己的動機が特徴であるという結果を得ている。そのため，教育現場においては，利己的な動機を満足させるような導入の必要性をあげている。つまり，参加のきっかけとして，ボランティアによって単位取得や，進学・就職の際の評価に反映されるなどのメリットがあるから参加するという義務によるボランティア，あるいは，自分に義務を課すという「課題型」ボランティアともいえる。その後，ボランティアを通して地域や活動対象への貢献という意識が高まれば，活動は継続されると考えられる。

さらに，柴田ら（2004）は，ボランティア活動が課された活動のみ体験した場合，今後の活動への意欲は低くなったという。そして，課された活動を行った後，自発的に活動を行った場合は，今後の活動意欲が高まったとも述べている。活動意欲の継続には，課された活動を課されたと印象を持たせないことが，自発的活動につながるとも指摘している。大束ら（2014）によれば，ボランティア活動は部活動と連携して継続していることを示唆している。山下ら（2015）はスポーツ活動主体からのボランティア活動への発現を示唆し，これを「互酬性」と呼んだ。これらのことから，「依頼型」ボランティアが，学校・教員，指導者から高校の部活動へ課された「課題型」ボランティアとなっているのではないかということが伺える。部活動に所属しているから課された活動なのか，活動自体に興味関心や役に立ちたいという気持ちからの活動なのかによって，将来，部活動を離れてもボランティアが継続されるかということだと考

えられる。

Ⅴ．まとめ

本研究は，若獅子旗なぎなた大会の運営に携わった高校のなぎなた部に所属する高校生41名を対象に，スポーツボランティアについての認識を明らかにし，参加の促進と継続性を検討するために行った。その結果，高校生の多くは「依頼型」ボランティアであったものの，ボランティアという認識が低いことがわかった。さらに，「ささえる」スポーツ，スポーツボランティアが高校生に浸透していないことも示唆された。また，高校生は与えられた役割を遂行しながら、なぎなた競技について学び・情報を得ていたことがうかがえた。また，大会運営には競技経験があるほうがよいと認識していることもわかった。

日本の地方大会レベルにおけるボランティアは，「依頼型」ボランティアの傾向にあるといえる。そこには，競技団体などの大会主催者，学校・教員・指導者といった依頼の仲介者には，それぞれに依頼以外の期待があることが推察された。ボランティア活動者である高校生にはやるべき（自己強制・自己犠牲），やりたい（意欲・欲求）だけでなく，しない自由の保障が必要だと考えられた。そこで，本研究からは以下の３点の課題が生じた。

- 学校・教員・指導者からの「依頼型」ボランティアに対する「しない自由」の有無
- 「やるべき（Sollen）」と「やりたい（Wollen）」の二つの自発性の実態
- 「依頼型」ボランティアと「課題型」ボランティアの関係

これらの課題については，さらなる調査によって，明らかにしたいと考える。

Ⅵ．謝辞

本研究は，若獅子旗なぎなた大会を主催される福岡県なぎなた連盟，ならびに，大会運営に協力された高校生，一般社会人の方の協力により行うことができました。その他，関係各位のみなさまに感謝申し上げます。

Ⅶ．文献一覧

FAIRLEY S・Young Han Lee, et al (2013), Considering cultural influences in volunteer satisfaction and commitment、Event Management 17、pp.337-348.

近藤良樹（1998a），ボランティアと個人の自発性，HABITUS（西日本応用倫理学研究会）1998年５月号，pp.35-47.

近藤良樹（1998b），ボランティアにおける「任意性」規定の意義，HABITUS（西日本応用倫理学研究会）1998年７月号，pp.49-58.

Markus H. R・Shinobu Kitayama (1991), Culture and the Self." Implications for Cognition, Emotion, and Motivation、Psychological Review1991 98 (2)、pp.224-253.

Mirsafian. H・Mohamadinejad. A (2012), Sport volunteerism: a study on volunteering motivations in university students, J. Hum. Sport Exerc7 (1), pp.73-84.

文部省・スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究協力者会議（2000），スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究報告書，p.4.

文部科学省・スポーツ審議会 (2017)，第２期スポーツ基本計画について（答申），http://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/03/01/1382789_003_1.pdf.

内藤正和（2009），地域のスポーツイベントにおけるボランティア活動に関する研究―依頼型のボランティアに着目して―，愛知学院大学心身科学部紀要（５），pp.7-15.

難波秀行・重城哲ほか（2017），スポーツ推進に向けた「する」「みる」「ささえる」の好循環を生むための基礎的調査，日本大学理工学部一般教育教室彙報103，pp.1-10.

二宮雅也（216）217)，『スポーツボランティア読本：「支える」スポオーツの魅力とは？』，悠光堂，p.63.

笹川スポーツ財団（2004），スポーツライフ・データ2004―スポーツライフに関する調査報告書，

笹川スポーツ財団，p.187.
笹川スポーツ財団 (2018),子ども･青少年のスポーツライフ・データ2017―４～21歳のスポーツライフに関する調査報告書，pp.147-150.
柴田和子・大山治彦ほか（2004），ボランテイア活動の動機における自発性と外発性，国際社会文化研究所紀要６，pp.119-131.
SSF スポーツライフ調査委員会・笹川スポーツ財団（編）(216)，スポーツライフ・データ2016―スポーツライフに関する調査報告書、笹川スポーツ財団、pp.102-106.
大東貢生・富川拓ほか：日本におけるサービス・ラーニングの展開（６）―部活動連携型の奉仕体験活動が及ぼす影響―、国際社会文化研究所紀要16、pp.145-156、2014
音成陽子（217），大学生のスポーツ・ボランティアのあり方，流通科学研究17（１）、pp.25-38.
内海成治・水野義之・入江幸男　編（1999),「ボランティア学を学ぶ人のために」，世界思想社，pp.6-8，1999.
山口泰雄編：スポーツ・ボランティアへの招待ー新しいスポーツ文化の可能性、世界思想社、pp.5-6，2004.
山下博武･行實鉄平（2015),スポーツ･ボランティアに関する研究動向―スポーツ経営学からの批判的考察―，徳島大学人間科学研究23，pp.39-55.